日本の妖怪観念の基層を考える［要旨］

著者	小松　和彦
会議概要（会議名,開催地，会期，主催者等）	「日本研究」再考 : 北欧の実践から Rethinking "Japanese Studies" from Practices in the Nordic Region, コペンハーゲン大学, 2012年8月22日-24日
ページ	11-13
発行年	2014-03-31
その他の言語のタイトル	Reflections on Japanese Yokai Culture [Abstract]
シリーズ	北欧シンポジウム 2012 Overseas Symposium in Copenhagen 2012
図書名	「日本研究」再考 : 北欧の実践から
URL	http://doi.org/10.15055/00001110

日本の妖怪観念の基層を考える〔要旨〕

Reflections on Japanese Yōkai Culture [Abstract]

小松和彦
Komatsu Kazuhiko

日本の「妖怪」にはたくさんの種類がある。こうした妖怪の特徴を考えようとするとき、その基層にある信仰的な観念や文化的な背景を理解することが大切である。

以下に、その主要な特徴を列挙してみよう。

(1) 古来、日本人の信仰の基層には、いわゆるアニミズムと呼ばれる観念があるとされてきた。アニミズムとは、自然界のあらゆる事物は、具体的な形象をもつとともに、そのそれぞれに固有の霊魂や精霊などといった超自然的存在、いいかえれば霊的存在（カミ、タマシイ）が宿っており、事物が作り出す諸現象には、その霊的存在の意思が働いているとみなす信仰である。この観念で重要なのは、この霊的存在は人間と同様に意思をもつ、つまり思考し喜怒哀楽を感じるとみなされていることである。例えば、山や川、木や水、岩などには霊魂が宿っており、その霊が人間に対して邪念・悪意を抱いて災厄をもたらすことになれば、それらの霊はいずれも「妖怪」もしくは「妖怪的な存在」となる。つまり、自然界に存在するあらゆる事物の霊魂は、潜在的な妖怪的存在であるといえるのである。自然の精霊の妖怪化として、蛇や狐、蜘蛛、鳥（鳶）などを挙げることができる。

(2) こうしたアニミズム的観念は、日本では自然物を加工して作り出した器物・道具のたぐいにまで拡張されてきた。すなわち、器物・道具にも霊魂・精霊が宿っており、扱い次第で人間に災厄をもたらすと考えられた。つまり、器物や道具の霊魂は潜在的な妖怪的存在であるといえる。こうした観念によって、たくさんの器物・道具の妖怪が生み出された。これらの妖怪は「つくも神」と呼ばれている。

(3) こうした霊的存在の悪意が顕現化したとき、古代から中世頃の日本人は、通常、それを「鬼」もしくは「鬼神」と呼んだ。つまり、鬼とはさまざまな邪悪化した霊魂・精霊の総称であって、これらの「鬼」が夜になって群行する様子を、「百鬼夜行」と称した。したがって、鬼は今日の「妖怪」に相当する。また、これらの鬼は、今日の画一化された、角をもった筋骨たくましい鬼のイメージに留まらず、その出自を暗示する属性を留めるかたちで表現された。この結果、妖怪図像も多様化することになった。

(4) 日本では、さまざまな怪異現象に「名づけ」がなされた。この「名づけ」には、怪異現象を引き起こした霊的存在を想定し、その霊的存在の名前を用いた名づけがなされる場合と、怪異現象の状態をそのまま表すような名づけがなされる場合があった。例

えば、深山で木が伐り倒されるような怪音がした場合、それを年取った杣の霊が引き起こしている怪音と考えて「古杣」という怪異現象と命名した。深山の谷で、こちらが「おーい」と声を出すと谷の向こうから「おーい」と返答がある。これを怪異現象として「やまびこ」「こだま」と称するが、これはこの怪音を引き起こしたのが「山彦」（山の男）あるいは「木の魂」であると考えられたからである。この霊は「百鬼夜行」（群行するたくさんの鬼）の一種であるが、しかしその造形化がなされたときには、鬼とは異なる個性的な形象が与えられたのであった。

(5) 怪異現象の状態をそのまま表すような名づけの例として、例えば「小豆洗い」という怪異現象を挙げることができる。これは深山に泊まったときに、谷川から小豆を洗っているような怪音が聞こえてくる現象である。これを「小豆洗い」とか「小豆とぎ」などと称した。この呼称は、この怪音が小豆を洗う音に似ていることからきているにすぎないのだが、これもやがて「存在化」して、「超自然的存在」が引き起こしている現象とみなされ、さらにその超自然的存在それ自身までが「小豆洗い」と呼ばれることになっていった。つまり、「小豆洗い」という現象は「小豆洗い」という妖怪が引き起こしている怪異現象となっていったのである。留意すべきは、「小豆洗い」という妖怪は、小豆を洗うことしかできない妖怪であり、これが妖怪のキャラクター化へとつながっていったようである。

(6) 妖怪の絵画化・造形化は「百鬼夜行」の図像化として始まったようである。この「鬼」は、中国から伝来した鬼の図像をもとにしていたものと思われるが、やがてそれぞれの出自がわかるような図像へと変化していった。例えば、鳥の「鬼」ならば鳥の属性を、道具の「鬼」ならば道具の属性を留めた「鬼」の図像を描こうとしたのである。その結果、多様な姿かたちをした鬼の図像が作られ、多様な「妖怪」の図像が生み出されることになった。

(7) 中世から近世へと至る過程で、超自然的存在、妖怪的存在への信仰心つまりそれらが実在するという観念が衰退し、小説家や絵師たちは、宮崎駿が自作のアニメーションのなかでトトロという精霊（妖怪）を創り出したように、過去に生み出された妖怪の造形を参考にしながら、自分の想像によってこれまで存在していなかった妖怪を創り出し、それを楽しむようになっていった。こうした小説家や絵師たちが創り出した妖怪たちもまた、多くの人々に受け入れられることによって、日本の妖怪文化史の一角を占めるようになっていった。つまり、フィクションのなかの妖怪たちもまた、日本の妖怪の仲間なのである。今も、古い時代の妖怪とともに新しい妖怪たちが生み出されているのである。

(8)「幽霊」とは、人間の死者の魂が生前の姿でこの世にさ迷い出てきたものをいう。この幽霊もまた、妖怪の一種である。この世に出没する理由はさまざまである。妻や夫、恋人への未練から、あるいは生前の約束を果たすために、あるいは怨みを晴らすために、等々。そのなかでも怨霊の場合は、古来、その姿かたちが鬼となって出現するとも考えられていた。ところが、江戸時代以降、怨霊は個性をもった人間の造形イメージで描かれることが多くなってきた。これによって幽霊の種類は格段に多くなったのであった。例えば、「東海道四谷怪談」のお岩、「番町皿屋敷」のお菊、等々。

以上、簡単にではあるが、その妖怪観を支える主要な特徴を述べてみた。

日本の妖怪文化史、とりわけ妖怪画の伝統は、こうした信仰的伝統や文化的特徴のなかから生み出されてきたのであり、したがって、妖怪文化を読み解くためには、多角的な観点からのアプローチが必要である。近年、妖怪文化史の復元が試みられ、それに伴って妖怪画の発掘が盛んに進められているが、まだ十分とはいえない状態にある。